

2016年6月19日 礼拝メッセージ

聖書：第二サムエル記 20章 3～10節

説教：平和なときに血を流す者

はじめに

読んでおわかりのとおり、ここには二つの事件のことが書かれています。やもめとなってしまった十人のそばめのことと、殺されたアマサのことです。この人たちは、理不尽な理由で苦しみを味わい、また殺されています。神の正義が曲げられたと言っていいでしょう。その正義はどのように回復されていったのか。そのような視点でこのところを見て参ります。

## 1 正義が曲げられている その1

### 1) 十人のそばめ

イスラエルは、ダビデの側につく者と、ダビデの息子アブシャロムの側につく者と二つに分裂し、両者の間で戦争となりました。ダビデは息子を失うという大きな犠牲を払って、戦いに勝利します。

ダビデはエルサレムに戻り、イスラエルが抱えているさまざまな問題に向き合っていきます。最初にしたことが3節に書かれています。ダビデがアブシャロムにおわれてエルサレムを脱出した時、留守番として十人のそばめを残して行ったのですが、そのそばめたちを監視つきの家に閉じ込めてしまったとあります。なぜそんなことをするのか。この女性たちは、戦争という混乱の中で家を守っていたのですから、ほめられてよいはずなのに、これではまるで悪者扱いです。

### 2) すべてはダビデの罪から始まった

その理由を知るためには、ダビデがまだ若

かったころに起きたある出来事にさかのぼらなければなりません。彼は、部下であったウリヤの妻バテ・シェバと姦淫の罪を犯し、都合が悪くなるとそのウリヤを殺し、もっとひどいことに、そのことをずっと隠し続けるのです。さすがに神は黙っていません。ダビデのところに預言者ナタンを遣わし、こう言わせませす。「主はこう言われる。『聞け。わたしはあなたの家の中から、あなたのうえにわざわいを引き起こす。あなたの妻たちを目の前で取り上げ、あなたの友に与えよう。その人は、白昼公然と、あなたの妻たちと寝るようになる。あなたは隠れて、それをしたが、わたしはイスラエル全部の前で、太陽の前で、このことを行おう。』」（12章11節）

ダビデはこのことばに迫られ、自分の罪を告白し、それによって罪は赦されました。でもダビデが犯したこの罪は、のちのち彼の家族を苦しめることになります。ナタンが語った預言は、アブシャロムの手によって現実となってしまいます。神の正義がねじ曲げられました。こんなことがあっていいはずはありません。人々は、白昼堂々で行われた罪の光景を目にして、次第に靈的に苦しみ始めます。

### 3) 十人のそばめたちの回復は？

そのような背景があったことを踏まえて改めて3節を読み直します。ダビデはイスラエルの王という政治家であり、また同時に信仰者でもあります。いまこのとき何を最優先事項としてやらなければならないのか、彼は見抜いています。イスラエルを立て直すため

には、政治的な問題に着手する前に、まず神の正義を取り戻さなければならない。そう判断します。そこで、十人のそばめを宮殿から離れたところに移してそこで一生養い、自分はいっさいそこに近づかない、そのことを公にあきらかにします。

皆さんはこれをどう考えるでしょうか。ダビデは問題をあいまいにしなかった、けじめをつけた、という点では評価できるでしょう。でも、この女性たちは被害者です。自ら進んでやったことではない。それなのに、一生閉じ込められて死んでいかなければならない。こんな理不尽なことはありません。

いっぽうイスラエルの人々はどうであったのか。白昼堂々と神の正義がねじ曲げられたのを見たのです。それで霊的に苦しんでいます。人々の苦しみを取り除くために、ダビデは何ができたでしょう。他の王さまなら、平気でそばめたちを殺したでしょう。でもダビデはそうしない。そばめたちも、自分の家族なのです。それで女性たちが生き延びられるよう配慮します。閉じ込めることはダビデの本心ではなかったかもしれません。でも、人々が納得するために、ダビデはこうするか他に方法はなかったと、私は信じます。

疑問が残ります。人々の苦しみは和らげられたかもしれませんが、この十人の女性たちはどうなるのか。彼女たちの名誉はどのようにして回復されるのでしょうか。それはまた最後に触れることにします。

## 2 正義が曲げられている その2

### 1) ダビデに抜擢されたアマサ

ダビデは次に政治的な問題に取りかかります。ベニヤミン人のシェバが、人々にさかんにデマを流しています。このまま放ってお

くなら、イスラエルは完全に二つに分裂し、これまでにない混乱状態になります。すぐに手を打たなければなりません。そこでアマサを呼び出し、こう言います。4節。「私のために、ユダの人々を三日のうちに招集し、あなたも、ここに帰って来なさい。」

アマサは、かつてアブシャロムの側について軍隊のリーダーをしていた人です。戦争が終わった時、そのアマサをダビデは特別に引き抜き、それまではヨアブはダビデ軍のリーダーでしたが、そのヨアブを降ろして代わりにアマサをリーダーにした。そんな経歴の持ち主です。

アマサは、つい先日までダビデ王の敵という立場でした。戦いに負けたのですから、昔の日本なら切腹ものです。ところがダビデから、自分を信頼し、軍隊を任せられると言われる。アマサはその恩に報いたいと考えます。この時もそうです。ところが、どんな事情かはわかりませんが、アマサは約束の期限までに戻ることはできませんでした。このことから新たな問題が起きていきます。

### 2) アマサの死

アマサが約束の期限に間に合わないことを知ったダビデは、今度はアビシャイを呼び出し、シェバを討ち取るように命じます。早速アビシャイは、兄弟であるヨアブを連れて出かけるのですが、なんと不思議なことにその途中であの遅れていたアマサにばったり出会います。そのアマサを、ヨアブは手に隠し持っていた剣で刺し殺してしまいます。

なぜそんなことをするのか。動機は単純です。先ほども言いましたが、ヨアブはかつてダビデ軍を指揮するリーダーでした。ところが戦争が終わると、ダビデはヨアブを降ろし、

代わりにそれまで敵であったアマサをリーダーに置いた。ダビデがそうしたのには理由がありました。ヨアブはダビデの命令に背いて息子アブシャロムを槍で突いて殺してしまっただけで、いまなら軍法会議でしょう。それくらいの重大な命令違反をしたのですから当然の処置のはずでした。

でもヨアブの気持ちはおさまりません。当然のことですがアマサに対するねたみの火が燃えています。そのアマサにばったりと出会いました。エルサレムから離れた場所です。ダビデの目は届きません。ヨアブは躊躇することなく、一突きでアマサを殺してしまいます。

### 3 神による正義の回復

#### 1) さばかれるヨアブ

ここでもまた新たに、神の正義が曲げられる事件が起きてしまいました。ダビデは、のちにこの事件の一部始終を知ることになります。でも、すぐには処罰はしません。二人の間には微妙な力関係が働いて、どうもダビデは、ヨアブの動きをコントロールできなかったようです。それでも神の正義を取り戻す必要があります。ではどうしたか。ダビデは自分の生きている間にできなかったことを、息子ソロモンに遺言として託すことにします。そのことが第一列王記2章5、6節にあります。「彼（ヨアブ）は彼らを虐殺し、平和な時に、戦いの血を流し、自分の腰と足のくつに戦いの血をつけたのだ。だから、あなたは自分の知恵に従って行動しなさい。彼のしらが頭を安らかによみに下らせてはならない。」ダビデの死後、遺言に従ってソロモンは直ちにヨアブをさばいていきます。このようにして、神の正義は取り戻されていき

ました。

#### 2) アマサの回復は？

でもそれで終わりなのでしょうか。皆さんは頭の隅で引っかかっているはずですが、ヨアブはさばきを受けて自分の罪の報いを受けたかもしれない。でも、アマサはどうなのか。何も悪いことをしていない、いやむしろダビデの恩に報いるために一生懸命働いていたのに、ヨアブにねたまれて殺されてしまう。なんとかわいそうな人生です。神の正義が回復されるのは結構だけれども、アマサはどうなのか。殺され損ではないのか。神はご自分の正義のことだけを気にしていて、アマサのことはどうでもよいということなのでしょうか。

#### 3) イエス・キリスト

もちろんそんなはずはありません。イエス・キリストのことを思い起こします。この方は十字架で死なれました。十字架につく前、イエスは弟子たちに何度も語っておられました。「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日の後によみがえらなければならない。」（マルコ8章31節）

もし、この方が十字架で死んでそこですべて終わったというのなら、私たちには何の希望もありません。そばめたちの名誉回復も、アマサの名誉回復もなんの手立てもありません。しかし主は、三日目に死からよみがえりました。それは私たちにどんな恵みとなるのか。たとえ生きている間に名誉が回復されずに死んだとしても大丈夫、神には手遅れとすることを言っています。

十人のそばめたちは、政治に振り回され、

ダビデの罪によって汚れた者と言われて一つの家に閉じ込められて死んでいきます。ダビデは精一杯やったのでしょうか、それ以上どうすることもできませんでした。アマサのこともそうです。もしダビデが彼をリーダーに選ばなかったなら、死ななくて済んだのです。全部自分のせいです。神はダビデの苦しみをご存じです。ダビデにできなかったことを、主がしてくださいませ。

私たちもそうです。自分のせいであの人に大きな迷惑をかけた、ということがあるでしょう。なかには自分のせいで、人を死なせてしまった、という方もいるでしょう。私たちはどうすることもできません。しかし、主は取り戻してくださいませ。必ず神の正義は回復されなければならない。そのとき、私たちにできなくなっていることも、主は回復させてくださる。そのような十字架であったことを、改めて思い起こします。